

オ ジ ュ ッ セ ー ア の 体 育 思 想

山 崎 秋 則

Akinori YAMASAKI

ま え が き

アメリカの体育学者＝クソンはその著に於て（1952年）

「古代ギリシャ人の精神に於て体育を認めるようにアメリカ人を導くが為、体育教師が立ち向わねばならぬものこそスコラ主義である」

と記しているが、我が国に於ては明治以来、近代文明のたち遅れを急速に恢復する為に生じた功利的打算の故に、結果的には、矢張り西洋中世の体育に対する否定的契機と、殆んど同様な状態にあつて、然もその底流はまだ深く、体育の前進に大きな障害を与えていることは、アメリカ以上であることに異論はないであろう。

この点に関して、ホーマーの作になるオジュッセーア (Odysseia) の体育思想を考察してその真髓を探り、それが如何に現代の体育に多くの示唆を与える所があるかについて論及したい。

(一) 梗 概

ホーマーは前八世紀頃ギリシャ黎明期の詩人で、その著イーリアス・オジュッセーアは、世界文化史的意義をもつて、古今に於ける最美最高の大叙事詩であるといわれる。

イーリアスはトロイア戦役に取材したものであり、体育としては当時の競技の方法や有様が述べられ、オジュッセーアは智謀勝れたオジュッシュースが中心的人物で、彼はギリシャの諸将と共にトロイアに遠征し、凱旋するまでに二十年を要するのであるが、その最後の帰郷前四十余日間に亘る事件を描写した叙事詩である。

体育的事柄は全篇に散見されるが、中でも最も仔細に描写され、且つギリシャ体育の真髓に通ずると思われるのは、その第八歌であるので、主としてそれを中心に考察を進めたい。

(二) 競 技 の 種 目

全篇を通じてホーマー時代には、競走、跳躍、槍投、円盤投の陸上競技、それに拳斗、角力、その他水泳、球技、舞踊が行われていたことを知る。唯イーリアスに詠まれている兵車競争は見られない。

之等の競技は、その何れも古代ギリシャに特有なものではなく、当時のエジプト、バビロニア、ペルシャ等に於ても行われていたものである。即ち陸上競技、斗技的な種目は、おそらく人類の歴史と共に非常に古く、彼等の生活と結びついて発展し、遂に競技として形成されたものであろう。このことは水泳についても同様のことが考えられる。舞踊は本来、種々の神霊の加護をよび起すことにあつたが、オジュッセーアでは、第一歌でオジュッシュースの妻ペーネロペーアの求婚者達が、

歌と舞踊に興じたということと、第八歌で競技終了後、バイエークスで一流の舞踊家が、踊る為に平らに地ならしされた広場で、弾唱詩人デーモドコスを取り巻いて心地よく踊れば、オジュッシーズもその巧みさに、心ひそかに驚嘆したとある。何れの場合でも、演技者、観る者共に楽しいものであり、喜ばれたことを知る。球技は石や武器で標的を狙い打つことによつて、発生したと考えられる。唯ここで附言したいのは、球技以外の種目は男性によつて行われていたが、球技的なものは女性間にも存在していたということである。即ち第六歌に於て、バイエークス王アルキ、オスのノーシカー姫が、その夢に現われた神女アテーネーの言に従い、侍女らと清い流れで洗濯をしてから、

頭上の被帛脱ぎ棄てて球の遊戯にとりかかり、

.....

斯くして姫は一人の侍女をめざして球を投ぐ、

球は狙いを誤りてうずまく水の中に落つ、

とあつて、ボール遊びがレクリエーションとして行われているが、このことから女性にあつても、或種の身体運動が行われ、又之に対する興味も存在していたことを推察できるのである。之は後年のアテネに於てさえ、女子体育が等閑に附されていたことと比較して興味あることであろう。尙男性の球技については、第八歌に相当高い技術を要するような描写があるが、之等両性間で行われていた球技が、やがてギリシャ・ローマ、そして中世を経るに従つて、徐々に近代スポーツへの形態に組織だてられていくのである。

(三) 競技精神

オジュッセーアの体育史的意義は実にこの競技精神であつて、第八歌に述べられている。之はトロイア戦後、幾多の苦難を経たオジュッシーズが、バイエークス島に漂着し、アルキノオス王に懇ろに歓待され、彼の念願とする帰国の便が叶えられて、船の準備がなされ宴会の席が設けられる。その時吟謡の巧みなデーモドコスが、トロイア戦役の物語りを吟唱すれば、オジュッシーズは回想に悲痛の涙を流すので、宴会を止め競技会を催すのである。

競技場では競走・角力・跳躍・円盤投・拳闘が「高貴なる青年」等によつて次々と競われていく。

(1) 競技の名誉性

王子のラーオダマスは、オジュッシーズの立派な体格を見て、

ああ珍客よ、或技を学びしならば、君も亦試みることよからずや？ 学べる君と我は見る。

その生命のある限り、手足を以て成し遂ぐる

業に優りて大いなる誉は絶えてあらざらむ。

いざ試みよ、辛勞を君の胸より取り払え、

と言つて挑戦するのである。この競技会はオジュッシーズの気分轉換の為に行われたものであるが、彼の脚・腕・頸筋何れも筋骨たくましく、若い時代に競技を行つたであろうと思われる所から、交歓試合の意図も含めたと考えられるので、共に技を競つてみたかつたのであろう。

当時の貴族乃至は支配階級に属していた若人は、好んで競技を行っていたのであるが、それは国防的見地にも立っていたであろうが、後代ギリシャの教育に於て、体育が大きな地歩を占めていたことを考えた時、競技は教育を受ける若人の教養として、父か或は郷党が之に当つたことであろう。教育の場としては、訓練所・練習所というものは見られず、おそらく適当な広場で行われたことと思う。然も当代に於て既に今日のように厳然としたルールが規制され、単に力の争いではなく、むしろその力・技術を具備している人間そのものの、価値判断の拠り処でもあつたと考えられる。従つて彼等は、競技を知力・精神力・体力等人間能力の総和を、公式に吟味する世界としていたのであつて、己れの優位を公然と誇示する唯一の機会であり、試合に臨むことすら名誉なこととし、ましてそれに勝つことは無上の光榮と思つていたわけである。

こうしてオジュッサーアの体育思想を表現する歌の冒頭に、その名誉性を挙げているが、之こそホーマー時代の競技精神の根幹と考えられるものであつて、以下はその名誉的感情の具体的諸特質を、主としてオジュッサーアの心の動きと照合して、述べてあるものと解釈したい。

(2) 競 技 の 公 正

ラーオダマスの言葉に対して、彼は自己の悲運に胸がふさがれ、競技を行う気になれないと言つて、おだやかに拒むのである。然しこのことは他方から見れば、名誉の機会を自ら放棄したことになり、王子にしてみれば、幾分期待外れの感を受けると共に、人物が疑われて、

異郷の客よ、世の中に競技は広く行わる、
 之を学べる人々に我は汝を比ぶまじ、
 むしろ漕座の多き船、あなたこなたに乗りまわし、
 商事営む水夫らの頭となりて、商品に
 心を配り、強慾に利益を求めあさるもの、
 之らの輩に比ぶべし、競技学べる者に似ず。

といつて彼を軽蔑するのである。

支配階級に属していた競技者層は、彼等の生活を維持するのに自ら齟齬する必要はなく、殆んど家僕の勤労の上に安閑としていた。従つて、競技を行うのも生活の具としてではなく、教養として身に体するのであれば、技術の練磨と身体育成、更にそれを通してなされる、人間完成への手段とするのが目的であつて、金銭的に物質的に得る為ではなかつた。他方、商人は社会的地位が競技者層より低かつた上に、生活目的の為に物品を売り利益を収めねばならなかつた。それは職業柄当然なことであつても、彼等は営利という最終且つ最高の目的を達する為には手段を選ばず、その過程にどのような方法を用いるかは問題でなく、不正を取て行うこともあつて、競技者層から軽蔑されていたのである。

このことは現在のアマチュア規程と非常に関連する所があつて、その第一条に「アマチュアとは単に運動競技愛好の為に競技するものをいう。」とその根本的特質を述べ、第二条以降では運動による営利、売名等を全く否定しているが、オジュッサーアの精神と殆んど同様である。之は又イギリ

ス始め、近代スポーツの行われていた諸国で、その發生に於て例外なく貴族間で行われ、且つアマチュア的であつた事実からも、競技の在り方は本質的には、ホーマー時代から現在に到るまで変りはなく、その名譽性と關聯して營利を否定する公正さに、或は清廉潔白な所にあつたことを示すものであろう。

(3) 廉 恥

こんなにも蔑まれて、オジュッシーアは眼を怒らせ、
汝何者！ 乱言を吐きて愚の者に似る、

.....

かくも劇しく激せしむ、我は汝の言う如く、
競技を知らぬ者ならず、わが青春にわが腕に
たよりし頃は、其の道に首先のほまれ勝ち得たり。
今憾むらく災難と憂によりて我弱る。
げに戦場に海上に経たる苦難は幾何ぞ！
さはれ斯く迄悩めども我は競技を試みむ、
汝の述ぶる乱言は私の心を激せしむ。

ラーオダマスはオジュッシーアが尋常な手段では、競技に参加しないと思われたので、彼を激しく侮蔑することによつて、否応なく出場するようにしむけたわけである。然し彼が参加を拒んだのは競技を知らぬ故でもなく、又未熟ある為でもなかつた。青年時代は数々の競技に参加して、優秀な成績をあげているのであつて、イーリアス第二十三歌に、ギリシャの勇将アキレウスがその親友パトロクロスの戦死を悼み、靈を慰める為に墓前で行う葬禮競技 (funeral games) に彼は角力で引分優勝し、更に競走には堂々優勝したことが描写されているのである。唯現在は二十年間に亘る戦争と流浪の生活で、心身共に疲労し、最悪のコンディションで競技の出来る状態ではない。然し商人にたとえられ、競技者らしくないと侮られて名譽を傷つけられては、もはや之を隠忍することはできないとして、決然起つた所に競技者の廉恥心を充分感得できるのである。

こうしてオジュッシーアの心は次第に高鳴り、外套を着たまま競技場におどり出て、今までパイエース人が使用していた円盤より、はるかに重いものを取りあげ投げた所、従来の記録を大きく破るのである。

(4) 五 技

そこで彼は意気軒昂として、
心と意気と促さば、誰人にまれ、ここに来て、
別の競技をなさしめよ 一汝ら我を怒らせり一
拳斗・角力・駈け走り、何れを問はず試みよ。

.....

世間の人になす技の何れも我は拙ならず、

之から理解できることは、競技者は単に一種目にのみ秀でたのではなく、当時行われていた競技の種目は、等しく身につけていたということである。彼等は心身の調和的な発達を希求していたが、又身体そのものをも均齊に発育させたいと願ひ、その美しさ力強さを追求していたのであつた。それが為には一種目にのみ専念するより多種目に精進し、多方面から然も均等に筋肉・骨格等に働きかけることにより、身体の調和的な発達を計つたわけで、ギリシャ時代に五技（Pentathlon）が競技の中でも重要視されていた傾向は、すでに当代に発しているのである。現在も十種・五種競技は存在しているが、その競技者層は身体的に能力的に、限られた男女によつて競われていることと比較して、ホーマー時代競技者の殆んどが五技的な運動を学んだことは、それが直ちに戦力となり、或は自己の生命を保護する手段ともなつたという特殊な事情もあろうが、競技の意義とその及ぼす影響を深く認識していた為であろう。

（5）知 性

とにかくこの時のオジュッシュースは、得意の絶頂にあつたと思われるが、
ラーオダマスを別にして、国人すべて試みよ。

彼は今我が主公たり、誰か主公と争はむ？

他国にありて客となり、厚き歓待うけ乍ら、

主公に対し苟くも競技を挑む者あらば、

そは思慮たらぬうつけ者、やがてすべてを失わむ。

王子であるラーオダマスは、現在のオジュッシュースにとつては主公である。嘗て弓技で己れの力に溺れ、神に挑戦して我が身を滅し、更に累を子孫にまで及ぼした古事を思い、彼は主公に挑戦することはしなかつた。あくまでも理性を失わない所に、偉大な競技者オジュッシュースの知性のひらめきをみるのである。即ち競技に対し勝れた力を持つと同時に、分別も亦兼ね備わる彼の面目が躍如としている。このような知性が、

主公を除き何人も我は拒まず、侮らず。

むしろ親しく彼を知り、試みんこと我が願ひ。

と言わせて、王子の戦の言葉が侮蔑的であつたのと比較して、彼の言葉は人間味溢れるもので、競技は技を競うことも大切であるが、同時に試合の相手をよく知り、之と親しくする所にもその価値目的があつて、真の競技の名誉性は強いばかりでなく、相手の人格を認める所にこそあるとして、最初怒りに燃えて、幾らか興奮的な言葉を発していたのが、この段階に於ては冷静にかえり、「智謀に富めるオジュッシュース」の本姿を、窺い知ることができるのである。

（6）謙 虚

始め駆け走りに於ても試みようと言つていたのが、

ただ競走は我恐る。バイエーケスの或人ら

我に優らむ、船中に屢々食に乏しくて、

我激浪のただ中に痛く劇しく悩まされ、

かくして為に無惨にも手足弛みて力なし。

と前言を翻しているのを見ることによつて、益々その感を深くするのである。このことは苦難に遭遇しない平常であればともかく、現在は体力・気力共に疲弊している上に、更に加えて、彼の年齢からすれば、既に競技の力は峠を越していると思われるのである。即ち四十才を過ぎては、すべての競技が青年時代より劣るのであるが、中でも競走の影響が最も大きく、彼は到底競走の得意なバイエークス人と、対抗することはできないであろう。そこで弱い種目は弱いと自ら認めて、前言を翻す所に競技者の謙虚な態度を見出すことができるのである。

(四) む す び

以上オジュツセーアの体育的な事柄を概観してきたが、ギリシャ最古の文献に競技をとりあげたことは、それが彼等の生活と、密接な関聯をもつていたことを証拠だてると共に、古代西欧諸国でも、等しく競技が行われていながら、後年ギリシャ体育として価値づけられるに至つたのは、実にギリシャの競技精神によるのであるが、その本姿はホーマー時代に、確立していたことを知る資料ともなるのである。

そうして之れは、現在及び将来体育が前進する際には、常に指針とし基盤とせねばならないものであろう。

参 考 文 献

- 土井 晩翠 訳 . オジュツセーア
" イーリアス
今村 嘉雄 訳 世界体育史
大谷 武一 訳 体育序説
岸野 雄三 ギリシャ競技の典型 体育学研究第一号
-